

## 【新潟県租税教育推進協議会長賞 優秀】

「使えない？支えたい。」

新潟県立

新潟南高等学校

二年 椎谷 陸斗

「どうして捨てるの？味はちゃんとしてるのに。」それは、僕が新潟市近くの農家を訪れ、規格外のトマトやナスを見せてもらったとき、思わず口にした言葉だった。夏休み、学校の研究活動の一環で現地を訪ね、「規格外品」に関する話をじっくり聞いた。その日、日差しの下で冷たいトマトを手にしたとき、僕の中の先入観がゆっくりと揺らぎ始めた。「形が良くなくても、味には問題ない。でも市場の基準から外れると、買い手もつかない。捨てざるを得ないこともあるし、土へ返すしかない。でもその処理にも時間とコストがかかるんだ。」その言葉に僕は胸がつかまる思いをした。学校やニュースでは見聞きしない「現場の合理と無駄。」農家の言葉には、単なる作業の話以上に切実な実態が込められていた。

特に補助金制度、税金による支援という具体的な話が出てきたとき、自分の税に対する浅い理解が恥ずかしくなった。調べたところ、新潟県や三条市などでは規格外農産物の有効活用を推進するため、流通促進事業や給食活用プロジェクトが地方自治体の予算で実施されていることが分かった。加えて、新潟市では数百万円規模の農業機械や施設整備補助を行い、コスト削減や品質向上を支えているという事例もある。さらに農林水産省の「経営所得安定対策（令和7年度）」による

と、米や麦、大豆等において収入が標準的所得を下回った場合、その差額の9割を補填するナラシ対策や、作付面積に応じて交付金を支払うゲタ対策があり、令和7年度には畑作物向け直接支交付金が面積当たり約二万円から三万円程度で支給されていることも明記されている。これらの制度はすべて、税金が財源となって運営されている。国税庁の「税の学習コーナー」にある通り、税金は公共サービスだけでなく、教育、福祉、産業支援など幅広く使われ、社会のインフラを支える血液的な存在であるという説明に合致する。その視点に立つと、僕の中の「税は国が勝手に取るもの」という存在論的な理解が根底から変わった。この体験を経て、税に対する僕の考えは変化した。税は単なる負担ではなく、地域の文化や産業、見過ごされがちな価値を掘り起こし、循環させるための仕組みだと気付いた。市場の基準から外れた野菜が、税による支援で給食や加工品へと生まれ変わる。そうした再発見が地域に新たな希望を生むことを僕は目の当たりにした。今後の社会には、税の使途に関する透明性とともに、「どの価値を再投資するのか」という視点が重要だ。例えば、新潟の規格外品活用や寒冷地の豪雪対策など、地域特性に合った柔軟な制度設計が求められるだろう。「規格外と思われてた野菜が、支援と工夫で新しい価値になる」という事実に触れたとき、僕は納税者としてではなく、社会の一員として「税による循環」に小さな誇りを覚えた。